「十年一日」と「十年一昔」

別府史談会　会長　後藤重巳

朝日新聞日刊の第二面に「時時刻刻」欄があり、時の国内・外問題に鋭い視線を向けており、見逃せないページである。これを見ていても、世の中には常に新しい問題が生起しており、社会は日ごと月ごとに変化している様子を教えてくれる。社会のこのような変化・変質そのものこそが「歴史」の実相と言えよう。

私事で恐縮だが、本年の旧正月七日、国の重要民俗文化財に指定されている国東西満山の「鬼会」に参詣した。この「まつり」には、四十年も前に初めて詣でて以降、機会を見ては参会しているが、鬼会の所作は、「差定」（プログラム）こそ旧然であるが、執行様は少しずつ変化して来ている。寺院・寺僧の時代への対応観や増加する遠来の参拝客の帰宅時間などを参酌してか、「差定」全二十二番は、簡略・同時進行などによって大きく省略され、かつては夜半過ぎまでも続けられていた「まつり」は、今日では夜半前の十時半には終わることになっていた。かつての鬼会の姿とは、確実に変わって来ている。

民俗行事の大きな特質は、それを背負う時代や社会相によって、大きく変質して行くことにあり、それが当然の理かもしれない。故に、国や県がそれを文化財に指定する段階で、その時点の「現況」を厳密に記録保存することになっているのである。

私どもの別府のまつり、たとえば鉄輪の「一遍湯浴み祭り」や「浜脇の薬師祭り」とて例外ではなく、少しずつの変貌を来たしている。俗に「十年一日」の喩えがあり、その変化は日常的には気付かない。しかし一方には「十年一昔」という言葉もあり、十年一区切りの変化があるとする見方もある。

すべての歴史事象は、急速に或いは徐々に変化しているのであり、本来の姿や変化の過程を確かめようとするのが歴史の研究である。現代史は、歴史のひとまずの到達点であり、歴史変化の最も最新の姿である。

私どもは、いたずらに古いものばかりを追うのではなく、まず、この歴史の到達点に視点を向けなければなるまい。

平成二十三年三月